

## 「かわしんビジネスフェア」に出展

### 川崎市内の企業に「知の発信」

第1回かわしんビジネスフェア(主催・川崎信用金庫)が、2月21、22の両日、川崎市中原区のとどろきアリーナで開催され、川崎市内の企業107社と本学を含む3つの大学が出展した。

本学のブースでは、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業に選定されている、社会知性開発研究センター／都市政策研究センターの報告書などを配布した。

特設セミナー会場では、21日に同センター研究員の宮本光晴経済学部教授が「川崎中小・中堅企業の実態と発展」を、22日には徳田賢二経済学部教授が「川崎市と専修大学の関わりについて～知の拠点形成の一翼を担う～」を講演した。



徳田賢二教授



宮本光晴教授

## 経営・田口ゼミ30周年記念祝賀会

### 出牛前理事長の慰労会も

経営学部の田口冬樹ゼミナールは、30周年記念祝賀会を2月10日、新横浜国際ホテルで開催した。田口教授の指導教授でもある出牛正芳前理事長の退任慰労会も兼ねて開かれたもので、卒業生や現役生、大学院生など130人が出席した。

前半は、卒業生の第5期・長谷川真也さん(ヤマト運輸新東京主幹支店長)、第21期・西山有美さん(脳神経外科東横浜病院秘書室、A-com取締役)が近況報告や業界動向、就職活動への心得などを熱く語り、後半では3、4年次生がゼミ活動の報告を行い、双方の交流を深める場となった。

出牛前理事長と田口教授から、お祝いとお礼のあいさつがあり、出牛前理事長には花束と記念品が贈られ、長年の労に感謝した。

## 都市政策研究センター「特別講演会」

### 地域社会活性化のポイント探る

都市政策研究センター主催の特別講演会「これからの地域社会」が原田博夫経済学部教授の司会進行で2月26日、神田キャンパスで行われた。

講師の前・総務事務次官で、現在は(財)地域創造理事長の林省吾氏が、街づくり、医療・介護、教育現場などの観点から、地域社会の再生のためのポイントを語り、「小学校区を重視した地域の特色を踏まえた活性化策と、住民ニーズにあった産業を育成していかなければならない」と強調した。



▲会場の質問に答える林氏。左は司会の原田教授

## 東京商工会議所主催のシンポ

### 魅力ある東京のまちづくり 商・渡辺達朗教授が提言

東京商工会議所主催のパネルディスカッション「まちづくりラウンド『もっと魅力あるまちへ』」(2月28日、東京・千代田区で開催)に渡辺達朗商学部教授＝写真＝がパネリストで参加。東京のまちづくりへの提言を行った。



ほかのパネリストは経済アナリストの森永卓郎氏、大西隆東京大学教授、原田敬美・前港区長、市川宏雄明治大学大学院教授(コーディネーター)で、活発な意見交換が展開された。流通政策の若手スペシャリストと紹介された渡辺教授は、「都市計画が『まちの賑わい』に結びつくとは限らない。無秩序や混沌の面白さを生かすのも魅力になるのでは」「だれのためのまちづくりか、焦点を当てて議論をする必要がある」などの意見を述べ、今後の方向性を示した。

## 《校友の本 紹介》

吉田 文典さんが出版

クロスワードパズル使った最新英語教材

「いかにして英語に興味を持たせるか」をモットーに「英語パズル・雑学教材シリーズ」などを出版してきた吉田文典さん(昭61文＝神奈川県伊志田高校教諭)の最新作「基本英単語が身につく! 授業に使える英語クロスワードパズル125」(本体3460円＋税)、「授業に使える“よく考える”英語クイズ&パズル集」(本体4000円＋税)が明治図書から、このほど出版された。



これまでも多種多様なパズルを掲載してきたが、クロスワードパズルの作成は初めてだったという吉田さんは、「何時間もかけて問題を完成させる苦労はありましたが、『解く楽しさ』と通じるところがありました。日本語と英語の両方の語彙の豊富さが必要となるので授業でぜひ活用していただきたい」と話している。

## 法科大学院

### 知的財産法の映像教材 国際研究大会で成果

本学法科大学院と中央大学法科大学院及び鹿児島大学法科大学院で3カ年をかけて推進してきた、文部科学省教育高度化推進プログラム・法科大学院等専門職大学院教育推進プログラム「知的財産に関する先端的映像教材の開発」プロジェクト(推進責任者・齊藤博教授)の成果を発表する国際研究大会が3月2日、東京・一橋記念講堂で開かれた。本学からは、矢澤昇治教授が「知的財産に関する国際紛争」を講演＝写真。3日には本学で映像教材についての討論会が行われた。



## 《専大校友を訪ねて》

### 持論は「棚は常に“耕す”」

紀伊国屋書店の4代目社長 乙津宜男さん(昭39経済)

全国主要都市に大型店舗を展開、米国、アジア、豪州にも進出中の大型書店の雄、紀伊国屋書店。昨年11月、4代目社長に就任した。創業者の故田辺茂一さん、松原治会長(CEO)が唱えてきた「本との出会いを演出する書店」の精神を継承する。



旧満州に生まれ、大分県日田市に育った。山野を駆け巡り、相撲や野球に夢中だった「ガキ大将」は、家に帰ればむさぼるように本を読む文学少年でもあった。カバヤキャラメルに付いていた点数を集め、児童書に換えるのが楽しみだった。特に『次郎物語』『母をたずねて三千里]などの”母もの、には、戦後の混乱で幼いころに離れ離れとなった実母への思慕が重なった。上京してからの専大時代、青春の思い出の中に書物はいつも傍にあった。「本は人を成長させる」。その思いは、いまでも変わらない。

東京五輪開催にわく昭和39年、東京・新宿本店を新築したばかりの同書店に入社。同50年に着任した熊本本店では、顧客を名前で呼んで応対し、評判に。仕入れ部門が長く、出版社の営業も顧客と同様に大切に接してきた。

創業80年、出版物の売上トップを走る同書店。和・洋書ともに豊富な品揃え、ベストセラーの確保や新刊戦略には定評がある。「本はどこで買っても同じ。競合店との差別化は書店が個性を持つこと。棚には常に手を入れ”耕す、こと」。そう持論を語った。

演劇ホールや画廊を持つなど「文化の薫る書店」という独創性は他の追随を許さない。世界的建築家ケイ・ニー・タンによる斬新な店舗設計で、3月、新潟、前橋、流山おおたかの森、ららぽーと横浜などの各店が続々と誕生した。

自宅から東京・恵比寿の本社への通勤は電車と徒歩。その習慣は社長になっても変わらない。「『自己実現』へ、強い意志を持って進め。夢は必ずかなう」。次世代を担う若者の奮起を願う。